

ま え が き

20 世紀を一言で言い表すことは困難であろう。それは人類史上かつて経験したことのない戦争と暴虐の時代であるとともに、世界的な平和の実現を誓った時代でもある。産業や技術の驚くべき発展によって、人類はそれまで想像もできなかったような健康や、生活上の快適さ・便利さ等を手に入れたが、それは同時に公害をも引き起こし、大気・土壌・海洋汚染のすさまじい悪化は、いまや地球上に住むあらゆるものの生存を脅かしている。

1997 年 12 月 13 日、ICU アジア文化研究所は「アジアの金属職人文化」と題するシンポジウムを、武蔵野美術大学美術資料図書館の協力を得て開催した。このシンポジウムはアジアの職人に焦点をあて、特にネパールの金属職人をとり上げた。テーマは一見小さいながら、その背景には 20 世紀が抱える上記のような問題に対する深い関心がある。

日本を代表する美術批評家であった岡倉覚三(天心)は、1904 年にアメリカのセント・ルイスで開催された万国博覧会の学術会議での講演で、日本が芸術的遺産を墮落させる道を喜々として進んでいることを嘆き、工業主義は芸術を破壊すると糾弾して次のように述べた。

「競争は生命の多様さの代りに流行の単調さをもたらします。目的は『安価』ということで『美』ではないのです。(略)どんなに貧しい職人のものであれ、人間の手の暖かさを感じることの出来る手仕事の代りに、今や機械の冷血な手が登場して来たのです。」(『絵画における近代の問題』)

その数年後、1920 年代に入って、もう一人の日本人が産業資本主義を批判し、日本の民芸の保存と愛用とを訴える運動を開始した。彼、すなわち柳宗悦は、真の美は人間の手仕事によってのみ生み出されるものであると考えていた。柳は機械生産と手仕事を対比させ、機械生産によって得られるのは速度、力、同一形態、および精確さであるが、手仕事によって得られるのは創造性、適応性、自由、そして一つとして同じものがないというかけがえのなさであると述べた。機械生産が拡大することによってもたらされる価値観を、柳は恐れたのである。

20 世紀の間に機械文明は世界中に広まり、ネパールのような西欧から遠く離れた地域でも、機械は人々を全く未知のものに向き合わせ、ライフ・スタイルや製品の素材などに大きな変化をもたらした。その結果、必ずしも岡倉覚三や柳宗悦が恐れていた事態がもたらされたわけではなかったが、場合によっては「近代化」は、岡倉や柳の想像以上に、従来の文化を根こそぎ破壊してしまうこともあった。

シンポジウムは ICU 国際関係学科教授であり、アジア文化研究所の所員でもある新津晃一教授を代表とする「職人文化と近代化研究会」によって企画された。「職人文化と近代化研究

会」は1996年から本研究所に所属しているが、アジア諸国における伝統的な職人文化が近代化の過程でどのように継承され、あるいは融合し、かつ変容をとげつつあるかについて、その生活・技術・社会関係等の実態を、フィールドワークから探り、その近代化に果たす役割を明らかにすることを目的としている。伝統的な職人文化は地域や民族によって固有の特色を継承してきたが、現在進行しつつある近代化は、この分野においても大きな変容を余儀なくしつつある。しかしその一方で、彼らが保持してきた文化は形を変えながらも根強く受け継がれて、地域の近代化の一方の担い手ともなっており、むしろ積極的な役割を果たしている場合も少なくなく、その実態を知ることが伝統的職人文化の研究にとって不可欠であり、アジアの近代化の特色を把握する上でも有意義である。研究会は1994年からネパール・インドネシア・タイ・日本等の金属職人およびその製品に関する研究報告を定期的に行ない、活発な活動が続けてきた。また1995-1996年度の2か年に渡って財団法人サントリー文化財団の研究助成を受け、数回に渡ってネパールで現地調査を行なった。研究活動の詳細については、このまえがきの後に活動報告を掲載したので参照されたい。今回のシンポジウムはその長年の研究成果の発表の場でもあった。講演の他にビデオによる報告も行われた。また武蔵野美術大学美術資料図書館民俗資料室の工藤員功氏らの手によって、ネパールの民具等の貴重な有形民俗資料の展示も行なわれ、学内外の多くの人々の関心を集めた。これらの資料は館長の田村善次郎教授、真知子さん御夫妻の長年の収集によるものである。展示を許して下さい武蔵野大美術資料図書館民俗資料室の御好意に感謝申し上げます。

本号に掲載された論稿のほとんどはシンポジウムでの講演に加筆していただいたものであり、産業的発達をもたらすものの両義性を問題としている。容赦なく進む産業化によって絶えざる影響を受けている伝統的職人業の危機について検討するだけでなく、アジアの職人文化と近代的産業の創造的相互関係の例にも注目している。朝岡康二氏および石井溥氏の論稿は「職人文化と近代化研究会」での研究報告と講演を新たに書き直していただいたものである。論稿の後にはシンポジウムの際に行われたパネル・ディスカッションを、録音テープから書き起こして収録した。本号末に掲載した資料の内、「ネパールにおける金属職人文化調査ノート」は、1996年12月20日から97年1月7日、および97年3月下旬から4月上旬にかけて行なわれた「ネパールにおける金属職人文化」調査の一部を、図版を中心に整理したものである。職人文化研究の基礎資料として、関心のある方々の参考となれば幸いである。この調査に同行し通訳の労をとってくださった方々の内、シャム・ダンゴル氏とロク・バラール氏が本号に寄稿してくださった。シャム・ダンゴル氏はカトマンズの農民カーストの一つである「ジャブ」の生活について、自らの生活体験を混じえた具体的事例による概説的紹介を、日本語で寄稿していただいた。ロク・バラール氏は、金細工師であった彼の父親のライフ・ヒストリーを寄稿して下さいだったが、今世紀前半におけるネパールの金細工師カーストの人々の生活や習慣などが読み取れて、大変興味深いものである。原文は英語であったが、アジア文化研究所で日本語に翻

訳した。

このシンポジウムを開催するにあたっては、UBCHEA からの財政的支援をいただいたことに感謝の念を記したい。末筆になったがシンポジウムに出席して下さることによって我々に大きな励ましと支えとを与えてくださった在日ネパール大使代理のルードラ・ネパール閣下に心からの感謝を申し上げる。

本号はこれまでになかった形式の論稿を掲載したため、出版には実に多大な困難があった。それらを乗り越え懸命に出版の準備を進めてくれた本研究所助手の高崎恵氏と宮沢恵理子氏への謝意を記したい。また「職人文化と近代化研究会」のメンバーであり、本研究所助手でもある香月節子氏には、本号の内容全体をまとめるにあたって大変な御苦勞をおかけした。また氏は本号の為に沢山の素晴らしい図面を描いて下さった。氏の研究と芸術的才能に敬意を表したい。

1998 年 3 月 31 日

アジア文化研究所所長
M. ウィリアム・スティール

「職人文化と近代化研究会」活動報告

本研究会は1996年9月24日付ICUアジア文化研究所所員会議にてアジア文化研究所の共同研究プロジェクトの一つに位置付けられた

「職人文化と近代化研究会」のメンバー及び所属

新津晃一(会代表)	ICU 教養学部 国際関係学科
田村善次郎	武蔵野美術大学 造形学部
田村真知子	
朝岡康二	国立歴史民俗博物館 民俗研究部
南真木人	国立民族学博物館 第三研究部
香月洋一郎	神奈川大学 経済学部
小井土満	武蔵野美術大学 造形学部
真島俊一	TEM 研究所所長
橘 健一	東京外国語大学大学院院生
Lok Baral	Nepal Tribhuvan 大学 Amrit 校
香月節子	ICU アジア文化研究所
協力者	
Shyam Dangol	Nepal 日本語研究学院
磯谷慶子	武蔵野美術大学 造形学部
塩崎由貴子	武蔵野美術大学 美術資料図書館民俗資料室
新津総子	東京工芸大学 学生

調査

1995 年

- 3.13～4.20 新津、朝岡、田村(真知子)、現地共同研究者 Lok と研究協力者の計7名によるネパール現地調査。①カトマンズ市内及びバタン周辺地域における金属職人の調査。②カトマンズ盆地外のダディン・ベニガードでの鍛冶職人村の調査。③西ネパールのパルパ・チャハラでの鍛冶職人の実態調査。
- 9.12～10.8 南の西ネパールのナワル・パラシ ①ボジャ村(マガール村)及び②パルパ・チャハラー村の調査。①では主として鍛冶屋炭の炭焼き ②では現地共同研究者 Lok の村の金・銀細工者の実態を調査。
- 10.27～28 新津、朝岡、田村、南、香月の他研究協力者の計8名、新潟県燕市及び三条市のノミ鍛冶、はさみ製造、洋食器製造、伝統工芸鋳起銅器製作など視察。又現地の鍛冶職人との会合を持ち、経営実態などの聞き取り調査。

1996 年

3.1～4.20 新津、朝岡、南、小井土、橘、Lok の他研究協力者新津(総子)等計 10 名によるネパール現地調査。① カトマンズ盆地内の都市近郊農村の鉄鍛冶。② パタンの伝統的な鉄鍛冶及びその他の金加工職人。③ チェトラパティの小規模鉄工場。④ カトマンズ盆地内工業団地(パタン、バラジュ)鉄工場。

11.20～12.8 新津はネパール現地調査。中部山岳地域。① ミャクディ・ガーラ村、チトレ村等マガール族の村及び② ムスタン・マルファ村のタカリ族の村。③ 同内ムクチナート地域のチベット人の村等における鉄鍛冶職人の調査。特に鉄鍛冶職人の出自、村内での社会的位置づけ、経済、社会生活の実態を主とする調査。

1996 年～1997 年

12.18～1.10 田村、朝岡、香月、協力者塩崎の計 4 名によるネパール現地調査。
① 西ネパールのパルパ・チャハラ村に定住する鍛冶職人、及び銅鍛工職人。
② ポカラ・ビムセントールの金物屋街と鍛冶職人。③ ポカラ・ビシャプール・プリバーダール村の出職鍛冶職人。④ カトマンズ盆地パタンの町の金細工師、鍛冶職人等を調査。以上の調査において鍛冶職人、銅鍛工職人、金細工職人の、各地域の使い手との関わり方、社会的な位置づけ、及びその技術のあり方を調査。また並行して職人の仕事場の平面・立面プランの測図、職人道具と製品個々の写真記録、及び測図面作製。

3.23～4.2 香月洋一郎のネパール現地調査。① 西ネパールのタンセンの銅鍛工職人、ポカラ・ビムセントールの金物屋街、ポカラ・ビシャプール・プリバーダール村の出職鍛冶職人の出身地サランコット、② カトマンズ盆地のパタン、バネバ周辺の調査。

研究会・シンポジウム

1994 年

- 2.8 第 1 回(会場/ICU 以下左記会場と違うもののみ特記)
① これまで調査したネパール、インドネシア・タイなどにおける諸職人の概要。② 毎回の研究会でそれぞれが研究報告をおこなうことを決定。
- 6.4 第 2 回 田村真知子 「ネパールの鍛冶屋」
- 7.23 第 3 回 朝岡康二 「インドネシアの鍛冶屋を中心に」
- 9.4 第 4 回 新津晃一 「ネパールの鍛冶屋・カトマンズ盆地を中心に」
- 11.13 第 5 回 香月節子 「日本の野鍛冶と鉄製農具」武蔵野美術大学

1995 年

- 1.21 第 6 回 橘健一「東ネパール・Dhankuta の鍛冶屋」
- 3.4 第 7 回 3 月のネパール調査の検討。
- 4.16 第 8 回 新津晃一・朝岡康二・田村真知子「ネパール鍛冶屋」
- 6.11 第 9 回 研究会名「職人文化と近代化研究会」(略称「職文研」)に決定。燕・三条の鍛冶屋調査の検討。
- 9.10 第 10 回 ① サントリー助成承認の報告とそれに伴う調査の検討。② ネパール調査、燕・三条調査の件。
- 11.5 第 11 回 ① 南真木人「ネパールの鍛冶屋」。② 3 月ネパール調査計画の検討

1996 年

- 1.7 第 12 回 ① 小井土満「ネパールの仏像鑄造」。② 3 月のネパール調査計画の検討。
- 2.4 第 13 回 ネパール調査の各自の研究テーマ、先行研究などについて検討。
- 2.25 第 14 回 ① ネパール調査最終打合せ。② 燕・三条鍛冶屋の作成ビデオの成果確認。
- 4.20 第 15 回 ネパール現地調査各自報告。
- 6.23 第 16 回 ネパール現地調査各自報告。
- 9.8 第 17 回 ① 今後のネパール調査研究の方針 ② ネパール在住の Lok 氏日本招聘の件。
- 10.11～31 共同研究者ネパールの Lok 氏来日。各メンバーの活動現場で研修。研修場所：国立歴史民俗博物館(千葉)及び周辺博物館、国際基督教大学・武蔵野美術大学(東京)、国立民族学博物館(大阪)、10/26.27 は京都にてネパール学会シンポジウムに参加。
- 10.20 第 18 回 ① Lok 氏を迎え 12 月のネパール調査の件。
- 12.15 第 19 回 ① 新津晃一、ネパール現地調査報告。② 12 月ネパール現地調査最終打ち合わせ。
- 1.15 第 20 回 ① 田村、朝岡、香月のネパール現地調査報告。② 3 月のネパール現地調査打合せ。
- 4.20 第 21 回 ① 田村善次郎、朝岡康二のネパール調査研究報告。② 香月洋一郎ネパール調査概要報告。
- 7.6 第 22 回 ① 石井溥氏(東京外国語大学)「ネパールのカースト制度」。② 南真木人調査報告。
- 12.13 ICU アジア文化研究所主催(「職人文化と近代化研究会」プロジェクト担当)でシンポジウムを開催。テーマ「アジアの金属職人文化」(於 ICU)

研究助成

1995・1996年度の2か年，財団法人サントリー文化財団の研究助成を受ける

研究テーマ 「近代化にともなうアジアの職人文化の継承と発展——地域素材から交易素材へ——」